

前稿の訂正を、先ずもって試みなければならない。原資料(サマーセット・モーム『世界の十大小説』)参照を怠った科である。当該箇所は以下にある。

…モービー・ディックは白鯨、白きクジラなのである。もとより、そのことのみに所以してではなからうが、サマーセット・モームは大自然を奔放に駆け抜る(泳ぎ抜る?)白きクジラを善の象徴、一方、蛇蝎のごとき執念の権化と化するエイハブ船長を悪の象徴とみるのだという。

ここにモーム自身の見解としてあげたものは、じつは、かれが前もってとりあげた幾人かの批評 — ルイス・マンフォードのそれとされるものを一例としてあげてみれば — モービー・ディックを悪の象徴と解し、エイハブ船長とそれとの戦いは善と悪との戦いで、善は結局悪のために敗れ去る、に対するものなのだ。だから、モームはつづけて問う — 白鯨は悪よりはむしろ善を表すとしては、なぜいけないのだろうか、と。「卑しい脱走者、世に棄てられた者、食人種」からなる乗組員ともどもエイハブ船長は滅ぼされ、かくして正義が行われたあと、白鯨が動ずる色も見せずに悠々とその神秘的の道を泳ぎ去るとき、悪は打ち破られ、善がついに勝利を得る、としては…、と。モーム自身のものとして、前稿に引いた見解だ。それが錯誤にすぎなかったことは、つぎの一節が物語る。

…マンフォードの解釈は、ある程度なるほどと思わせるものがあり、メルヴィルの陰鬱な厭世感ともよく一致する。

とは言え、アレゴリーという奴は、まことにもって扱いくらい厄介な動物である。頭で捕まえることもできれば尻尾でつかまえることもできるので、ぜんぜん相反する解釈でも同様にもっともらしいとすることができるらしい。

マンフォードの解釈が頭からのものとすれば、相反する尻尾からのものにモーム自身のあげた解釈が相当するというわけだ。これで、前稿の錯誤箇所訂正は済んだことになる…が、いますこしモームのことばを追ってみるのも面白からう。

それにしても、『モービー・ディック』を(筆者注:原文の「が」から「を」に変更)、そこにどのような寓意ないしは象徴が託されていようといまいと、そんなことには少しも煩わされずに読むことが、しかも絶大な興味をもって読むことができるのは幸いである。

『世界の十大小説』は、「十」とはあるが、世界の十一大小説(モーム撰)の紹介である。先ずフィールディングの『トム・ジョーンズ』にはじまり、以下『高慢と偏見』(オースティン)、『赤と黒』(スタンダール)、『ゴリオ爺さん』(バルザック)、『デイヴィッド・コパーフィールド』(ディケンズ)、『ボヴァリー夫人』(フローベール)とつづき、第8番目に『モービー・ディック』の登場となる。この出番には意味がある。モームは語る。

ところが、ここに、数こそ少ないが、読者の受ける感銘がこれまで述べてきた種類の小説とはまるで異なり、その書かれた目的がまたまるで異質的なもののように思え、したがってこれだけを独立させて一つに分類しなければならない一群の小説がある。たとえば、『モービー・ディック』、『嵐が丘』(筆者注:第9番目)、『カラマーゾフの兄弟』(同:

第10番目)がそうであり、ジェイムズ・ジョイス、カフカの小説(同:撰外)がそうである。

この「分類」の理由としてあげられるのは、「私の知る限り、文学上の子孫は一人も残していないのである」ということ…。「あの得体の知れない、しかし力強い『モービー・ディック』に、モームの見出す「幸い」、「絶大な興味」の手掛かりがここにある。小説とは、もちろん、知識のためにでも教訓のためにでもなく、もっぱら知的な楽しみのために読むのが本当であって…、といわれはするのだが、『モービー・ディック』以下については、それでことすむはずもない。さらに、構成、文体、背景事情などについてもさまざまに言挙げされはするが、ここではつぎの一点に着目することにしよう。

すべての偉大な小説を真に理解するには、作者がどのような人物であるか、分かる限りのことを知らねばならない、と私はこれまでに何度か言ってきた。ところが、メルヴィルの場合は、ほとんど正反対のことが言えるようである。

『モービー・ディック』を繰り返し読めば、副次的な諸資料からかれの生活、環境を知る以上に納得のいく、そのひととなりについて明確な印象がえられるというのだ。

すぐれた天賦の才に恵まれながら、そのせつかくの才能も悪霊の冒すところとなり、ためにちょうど龍舌蘭のように、すばらしい花を咲かせたかと思うと、たちまちその才能を枯らしてしまった男、嫌悪の念からつねに近づくまいとしていて、かえって本能に苦しめられた、陰鬱で不幸な男、…失敗と貧困のために世の中を白眼視するにいたった男、友情を切に求めながら、けっきょく友情もまた空なるものであることを知った心やさしい男という印象が…。

この「明確な印象」からうかがえることを、整理してみよう、もっとも語順変更の一ヶ所だけは容赦願うとして…。

天賦の才 (+) / 悪霊 (-)

すばらしい花 (+) / 枯らして (-)

近づくまい (+) / 本能 (-)

友情 (+) / 空なるもの (-)

心やさしい (+) / 白眼視 (-)

メルヴィル、かれのひととなり、そのいわば記号論的な構造(+/-)が、横列状にも縦列状にも構制をなし、しかも、それがモームの記述そのままにほぼ成り立っていることを確認しておきたかった。

『モービー・ディック』を繰り返し読むことは、他の場合とは違って、その副次的諸資料参照以上にメルヴィルのひとなりに明確な印象を付与するものであるとモームはいった。しかし、こうしてえられた明確な印象は翻って小説作品『モービー・ディック』そのものの構制を映し出す機能を同時に発揮し出すものなのである。